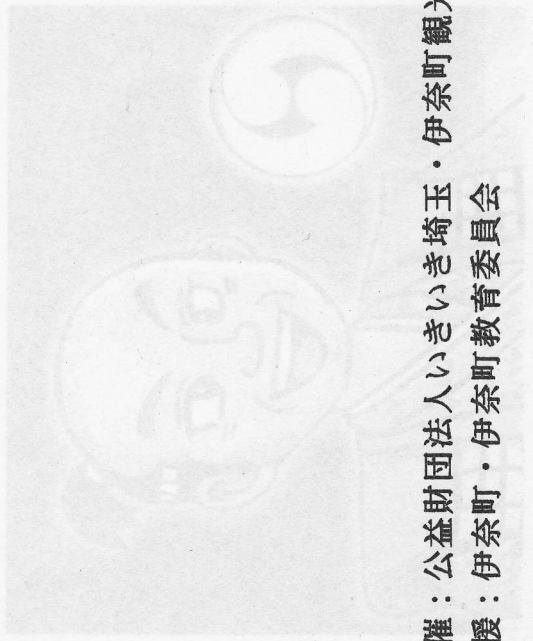


# 伊奈泉碑

伊奈泉東 半トヨロ  
(土例学史) 對建養否羊大高屋調高：五奥  
るでら心申赤大忠菜明半0る：ア一で突得  
の半葉開田澤 奥樹・木前木土るむはこ出五  
。こぶこはさ突得  
乃? (突得由脚基の器強立強羽幕川樹?)：善善  
1成緒各人有升全升脚耳乃? 1脚脚加羽幕可  
姓各耳乃・泉忠映? 1で5、且5半る105  
。斯出こ1脚災樹の大忠菜母畏次



主催：公益財団法人いきいき埼玉・伊奈町観光協会  
後援：伊奈町・伊奈町教育委員会

# 伊奈忠次の功績と人物像

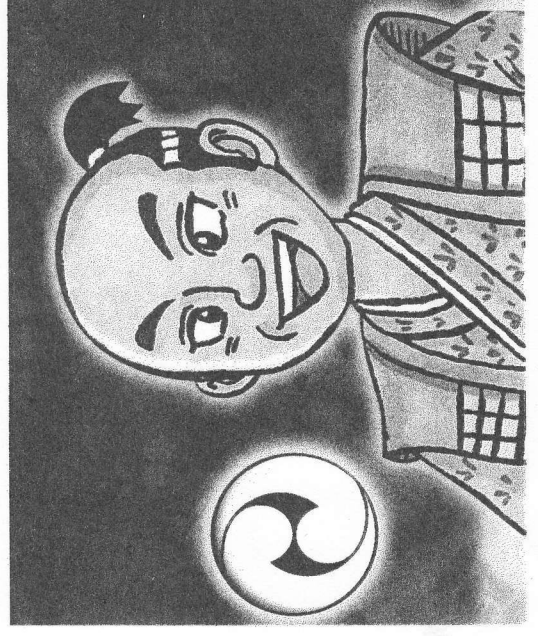
- ◆平成29年3月26日(日)
- ◆13:00~14:30
- ◆県民活動総合センター 小ホール

# 伊奈忠次の功績と人物像

1. 開演  
伊奈忠次の功績と人物像
2. 公益財団法人いきいき埼玉理事長 挨拶
3. 伊奈町長 挨拶
4. 講演
5. 休憩
6. 講演
7. 質疑応答
8. 閉演

## 和泉清司

- 1944年 東京生まれ
- 現在：高崎経済大学名誉教授（史学博士）
- ・研究テーマ：50年間伊奈忠次を中心とする近世における土木治水・防災、新田開発等の研究をおこなう。
  - ・著書：『徳川幕府成立過程の基礎的研究』『江戸幕府直轄領』『江戸時代全代官人名辞典』
  - ・2015年9月、Eテレ「知恵泉・江戸を救った男伊奈忠次の防災術」に出演。



# 伊奈忠次の功績と人間像

高崎経済大学

名誉教授 和泉清司

はじめに

江戸時代の関東の歴史、特に農村についての歴史を語る時、あるいは研究をしていると必ずといってよいほど伊奈忠次の名前につく。これは彼とその子孫である関東郡代といわれる伊奈忠治系一族が、天正18年(1590)徳川家康が関東に入国して以来、関東農村の成立と経営、さらには土木治水・防災等に大きく関わっているからである。つまり伊奈忠次は徳川家康の側近として、あるいは代官として家康の意向を受けて河川改修・堤防構築など江戸や利根川以南の農村を洪水被害から守ったり、河川の氾濫原の干拓による新田開発の促進と検地による生産高の掌握等、農民生活の安定化のために活躍した。今日みるような伊奈町の美田を創り出した功労者である。

本日はこのような幕府の成立期に活躍した伊奈忠次の果たした役割や人間像についてお話をしたい。

## 1、伊奈備前守忠次の来歴と人間像

まず、伊奈忠次の来歴についてお話をしたい。伊奈忠次とは江戸幕府を開いた徳川家康の家臣であり、代官を統括する代官頭として徳川氏の戦国大名時代から江戸幕府が成立した江戸時代初期にかけて家康を援けて活躍した人物である。

伊奈氏の出自は伊奈家の家譜(系図参照)によると、先祖は清和源氏源義家流といわれ、その子孫の易氏が室町幕府6代将軍の足利義尚から信濃国(長野県)伊那郡を与えられ、その子易次が伊那郡稲熊城に住み伊奈氏を称し、以後代々在住している。そして忠次の祖父、忠基の代に三河国(愛知県)岡崎に移り徳川家康の祖父松平清康に仕えている。その子忠家は家康に仕え、家康の嫡子岡崎三郎信康に仕えていたが、天正3年(1575)、信康が築山事件で織田信長の命で切腹させられると、その子忠次とともに和泉国堺に出奔し兄の貞吉の元にいた。この間土木工事その他様々な仕事をして苦勞していた。しかし天正10年(1582)6月、織田信長が本能寺の変で殺害されると、丁度堺にいた徳川家康に従い伊賀越えをして岡崎に戻り、忠次とともに再び家康に仕えている。忠次はやがて家康の近習となり、家康が支配した三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の5か国の検地や治水土木の面で活躍している。その後天正18年(1590)、家康が関東に入国すると、忠次もこれに従い現在の埼玉県伊奈町小室に陣屋を構え、関東領国の検地・新田開発等の農村支配、さらに河川改修・干拓と防災対策等の土木治水を中心に活躍して、江戸幕府の成立に大きな貢献をしている。このような忠次の来歴と功績については一昨年9月と12月にNHKのeテレ(教育テレビ)に出演してお話している。



伊奈忠次土  
像地  
改良  
区内

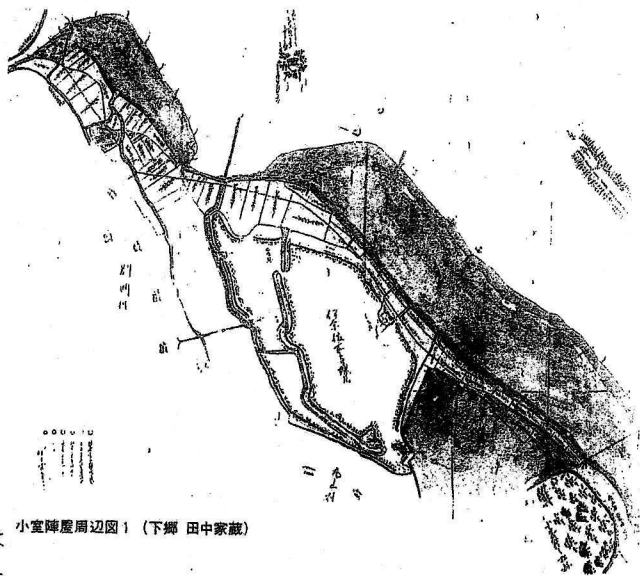
つぎに伊奈忠次の人間像を示すいくつかのエピソードを以下にお話してみたい。

天正18年7月の豊臣秀吉の小田原の北条氏攻めでは豊臣軍が東海道を進み、三河吉田(豊橋)に到着した時、数日間の風雨で天竜川や大井川が大水で進軍は困難な状況にあった。側近が水が引くまで滞在することを勧めたところ、秀吉は「たかがこれしきの風雨で進軍ができないとは何事であるか、兵法にも道路に大河があり雨にあった時には、できるだけ急いで渡らなければならないとあるではないか」と叱りとばすありさまで、まったく手がつけられなかった。この時行軍の道筋の整備をしてい

た忠次は秀吉の前に進み出て、強行軍のため上方兵はかなり疲労しているから、吉田に滞在して天候の回復を待つように強く進言した。その上秀吉の軍法論に反駁して「風雨のおり、急ぎ大河を渡ることとは、小軍の時において初めて納得できることで、大軍の時はどうしても若干の溺死者を出すことになる。そうすれば例え10人が流されても、噂は100人となって宣伝され、そのためかえって志気は衰え、北条方に利する結果のなる。まして長期戦を覚悟のこの小田原攻めには5日や10日の遅延が勝敗に影響を及ぼすとは考えられない」と述べた。この道理ある忠次の進言には、さすがの秀吉も感心してその言葉に従い3日間滞在したという。間もなく快晴になり船橋も整備されて、無事大軍は渡河・進軍できたという。また同年5月、小田原城の出城である伊豆山中城が落城すると、戦乱で荒廃した伊豆の農村の復興を、秀吉は家康の家臣である伊奈忠次に命じている。さらに7月には小田原城が落城すると、戦後の事務処理をする時にあたって、家康は接收した城内の倉の兵糧米の整理を忠次に命じたが、忠次はその数をみると約10万石にも上ったため、これを正確に調査・整理するには数十日を要すると判断した。そして数日を経ずして忠次は、家康のもとに駆けつけて調査の完了を報告した。家康は余りの俊敏さに驚いて、倉の計算や整理を果たして正確に行ったかと詰問したところ、忠次は「あれだけの兵糧米の整理をこのどさくさにいくら詳しく調べたところで、正確さを期すことはできない。そこでひとまず全部の倉に封印をして監視させておき、平穩になったらゆっくりと数量を計算して報告する。それでも決して遅くはない」と答えたという。これを聞いた家康は忠次のこの処理にかえって感服したという。

このように伊奈忠次は単に農政を中心とする地方巧者であるだけでなく、大所・高所からもの考える能力や経理の才能、さらに機転をも持っていたので、家康の信頼がますます強まったことはいうまでもなく、秀吉からも大きな信頼を得た。このため秀吉は忠次に対して「もし自分の家臣になるならば、すぐさま1万石を与えよう」と誘ったという。この話に対し忠次がどのように答えたかは伝わっていないが、この直後に家康が関東に移封されると、忠次に武蔵小室（伊奈町）で1万3000石（または1万石とも）を与えているところから、この時の話が背景にあったかもしれない。

また家康の関東移封にあたって一説には、家康が江戸を関東支配の拠点としたことは忠次への諮問の結果、決定したという。これは多くの家臣たちが北条氏の居城小田原を本拠とすべしと云っているのに対し、忠次は小田原は関東の東の端であり、関東全体の支配には



適していない。むしろ江戸は今城のそばまで海水が来るような場所であるが、これらを干拓して土地を確保して城下町を形成し、さらに海が近いので港を築いて、全国各地と船運によって結べば、経済的にも発展すると進言したという。さらに関東領国全体の地方支配を忠次一人に命じようとした時、家康は忠次に対し「関八州を自分のもののように大切にすること」・「配下のものを使う時は、絶対に依怙贖賈をしないこと」などの誓詞を出させたという。これは地方巧者、民政官として心構えを示したものと思われるが、同時に忠次の経営能力を評価していたからであろう。

2. 伊奈忠次の功績

つぎに伊奈忠次が江戸幕府の成立や河川改修・土木治水による防災、検地・年貢収取・新田開発等による農村支配にどのような役割を果たしたかについて述べると、伊奈忠次は戦時には徳川家康の武将として有名な本多忠勝や酒井家次、榊原康政、井伊直政ら四天王のように、戦場で武将として華々しく活躍する立場ではなく、後方から兵糧米や武器などを輸送する役割を担当していた。平時には代官頭として、主として江戸幕府の蔵入地（直轄領）の農村の支配や河川改修・干拓・新田開発等の土木治水等を担当していた。

この平時における農村の支配は、そこから徴収する年貢米が江戸幕府の財政の主要な部分であったので重要な役割であり、これは勘定奉行的役割（現代でいえば財務大臣）であった。また土木治水などは普請・作事奉行的役割（国土交通大臣）であった。さらに晩年には秀忠の側近として年寄衆（老中）に近い役割と町奉行の役割も果たしている。

(1) 土木治水と防災、新田開発・・・天正18年（1590）徳川家康が江戸に入城した頃の関東南部は、利根川や荒川、江戸川、中川、多摩川など大きな河川の洪水が相次ぎ湿地帯（氾濫原）が多かった。このため家康は関東南部の農村を洪水から守り、さらに江戸を洪水から守るために、伊奈忠次に命じてこれらの河川の治水を命じた。特に利根川は現在の流路とは違い、(地図1参照) ①川俣（行田市）から南下する会の川であった。忠次は文禄3年（1594）この川俣で会の川の流れを締め切り、東に流れる②浅間川の流路へ利根川の本流を移した（今の古利根川）。これが利根川東遷の嚆矢である。そのほか慶長13年から15年の間には赤堀川と綾瀬川の流れを桶川市小針領家から蓮田市高虫にかけて③備前堤（写真1）を築き切り離し、赤堀川の流れを元荒川に合流させ、ここを綾瀬川の源流（写真2）としたため、蓮田市と伊奈町との境を流れる綾瀬川流域一帯の洪水も減少し、新田開発が進んだ。これらの史跡は県民活動総合センターにほど近い、伊奈町の西の端、桶川市との境界あたりの元荒川処理センターのすぐ脇にある。

③

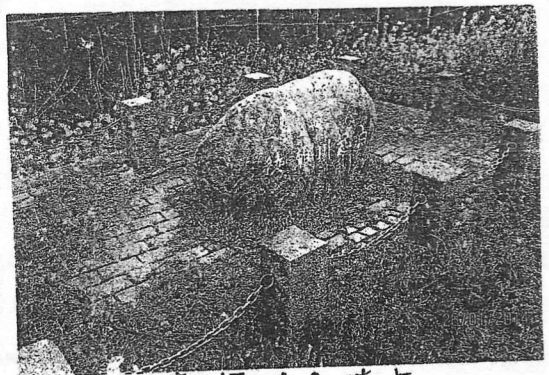
仁手

①



備前堤（桶川市）

②

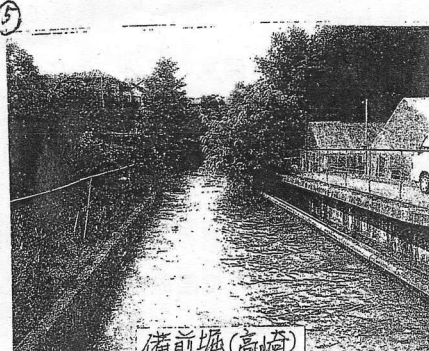
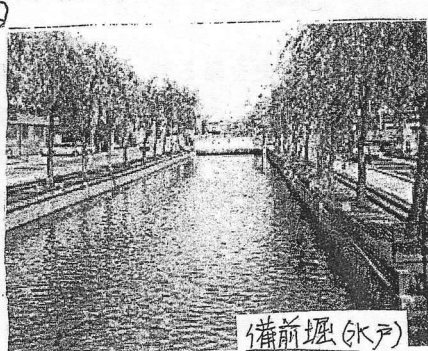


綾瀬川分岐点

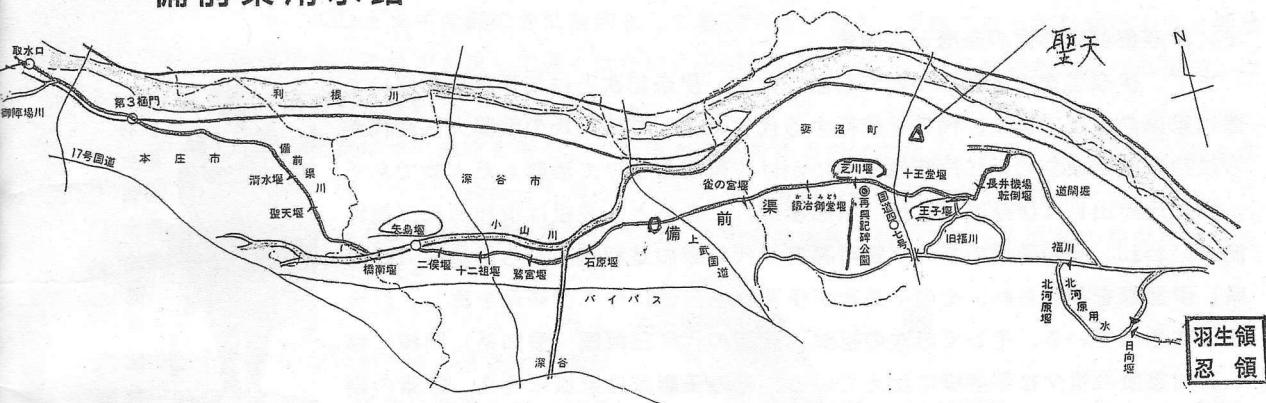
伊奈忠次が陣屋を構えた伊奈町の小室一帯もまさにこのような氾濫原の中にあっただため、伊奈忠次はまずこの地域の干拓と、その後の新田開発に力を注いでいる。このためこれら河川の堤防をしっかりと造り、洪水を防ぐとともに、氾濫原の干拓を行っている。また水田の灌漑用水として河川から田圃まで用水路を開削する必要もあった。この開削された用水路は伊奈忠次の官名である備前守の名をとって備前堀（備前渠）と呼ばれており、備前堀は現在の本庄・深谷・熊谷・行田・羽生市等、埼玉県北部各地を通過して約23kmに及んでいる(地図2参照)（写真3）。さらに忠次は水戸市の千波湖（写真4）近くや高崎市（写真5）近くでも備前堀を開削しており、これらの備前堀は今日もお灌

漕用水として利用されており、それだけ伊奈忠次が広く関東各地で活躍していたことを示している。

その結果、多くの田圃と新田村が成立し、現在の伊奈町域を含む埼玉県東部や東京都東部を中心に108か村、約7万石の新田を成立させている。これら新田からの年貢は幕府財政の増収に貢献している。今日みる蓮田市・白岡市域田圃地帯の基礎はこの段階に出来たといえる。



### ～ 備前渠用水路 ～



(2) 交通伝馬・・・江戸時代は江戸を中心に全国に道路（五街道）が伸びており、全国の大名が参勤交代によって江戸と国元とを往来する幹線道路としての役割を果たした。慶長6年（1601）、伊奈忠次は江戸と京都を結ぶ東海道に五十三次といわれる宿場を設置し、そこに人馬を配置して宿泊と物流の便を計っている。この制度は以後五街道をはじめ全国に広がっている。

(3) 諸産業の奨励・・・伊奈忠次は農民に対して耕作のほかに、炭焼き、養蚕、製塩などの余業をすすめる、さらに桑、麻、楮などの栽培方法を伝えて広め、農民の生活基盤の安定化を図ったため、農民からは神仏のように敬われたという。

(4) 幕府年寄衆・・・慶長10年（1605）、徳川家康は将軍職をその子秀忠に譲り、大御所として駿府（今の静岡市）に隠居したが、なお徳川幕府の政権基盤は固まっていなかったため、家康は全国支配のための諸政策を駿府から次々と発していた。ここに江戸の将軍秀忠政権（幕府）と駿府の大御所政権の二元政治となった。伊奈忠次は江戸の将軍秀忠の下で、代官の地位を越えて年寄衆（後の老中）に近い立場になり、貨幣の流通や寺社政策・裁判など幕府の政策に関与している。その一方でまた家康のブレーンとしても活躍している。

### 3、伊奈忠次の子孫の功績

まず忠次の次男である伊奈忠治は父忠次の死去後独立の代官となり、父の持っていた権限のうち地方支配の権限を引き継いで、川口市赤山に陣屋をおいて父同様関東の地方支配にあたった。以後この

忠治の子孫が関東郡代として、代々関東の地方支配に当たっている。忠治の功績ではまず防災と洪水対策としての河川の改修・治水・防災では父の利根川の東遷事業を引き継ぎ、会の川締め切り後の浅間川河道から元和7年(1621)佐波から旗井(大利根町)まで④新川通を開削し、さらに寛永18年(1641)新川通を延長して栗橋から前林まで⑤赤堀川を18km開削し、⑥常陸川に合流させて利根川の流れを現在の利根川の流路を確立させた。その後関宿(野田市)から江戸川を開削し、江戸湾に流下させて利根川の流れを分けて利根川の洪水の頻度を下げるとともに、⑦江戸川を開削し、ここを通して江戸へ物資を運ぶ舟運の役割(物流)も持たせた。また寛永6年(1629)には⑧久下(熊谷市)で従来の荒川の流路を入間川から支流の和田吉野川に付替えて現在の荒川の流れとし、荒川の洪水を減少させ江戸や農村を守ることに成功した。

次にこれら河川の改修によって洪水が減少すると、それまでの河川の氾濫原を干拓し新田開発を広く行っており、忠治の時代には武蔵国東部の埼玉郡・足立郡・葛飾郡三郡では新田開発後検地によって前述のように100か村近い新田村を成立させている。

ついで忠治の子で関東郡代第2代忠克は、江戸の人口増加に対応して、飲料水確保のため承応2年(1653)多摩川上流の羽村(羽村市)から江戸の四谷大木戸まで玉川上水43kmを開削して飲料水を引いている。また明暦3年(1657)には江戸が大火(振袖火事)に見舞われた時に、その復興・救済と都市改造に当り、東京の江東地区の開発も行っている。

第5代忠順は元禄16年(1703)関東の大地震(M7.9~8.5)で相模湾や九十九里沿岸で津波が三浦で6~8m、九十九里で5m、品川で2mなど大きな被害を出したため、その復興に当たった。同じく宝暦4年(1707)富士山が噴火(宝永噴火)し、小田原藩領農村や江戸の町なども大きな被害を出したため、その復興・救済にも当たっている。

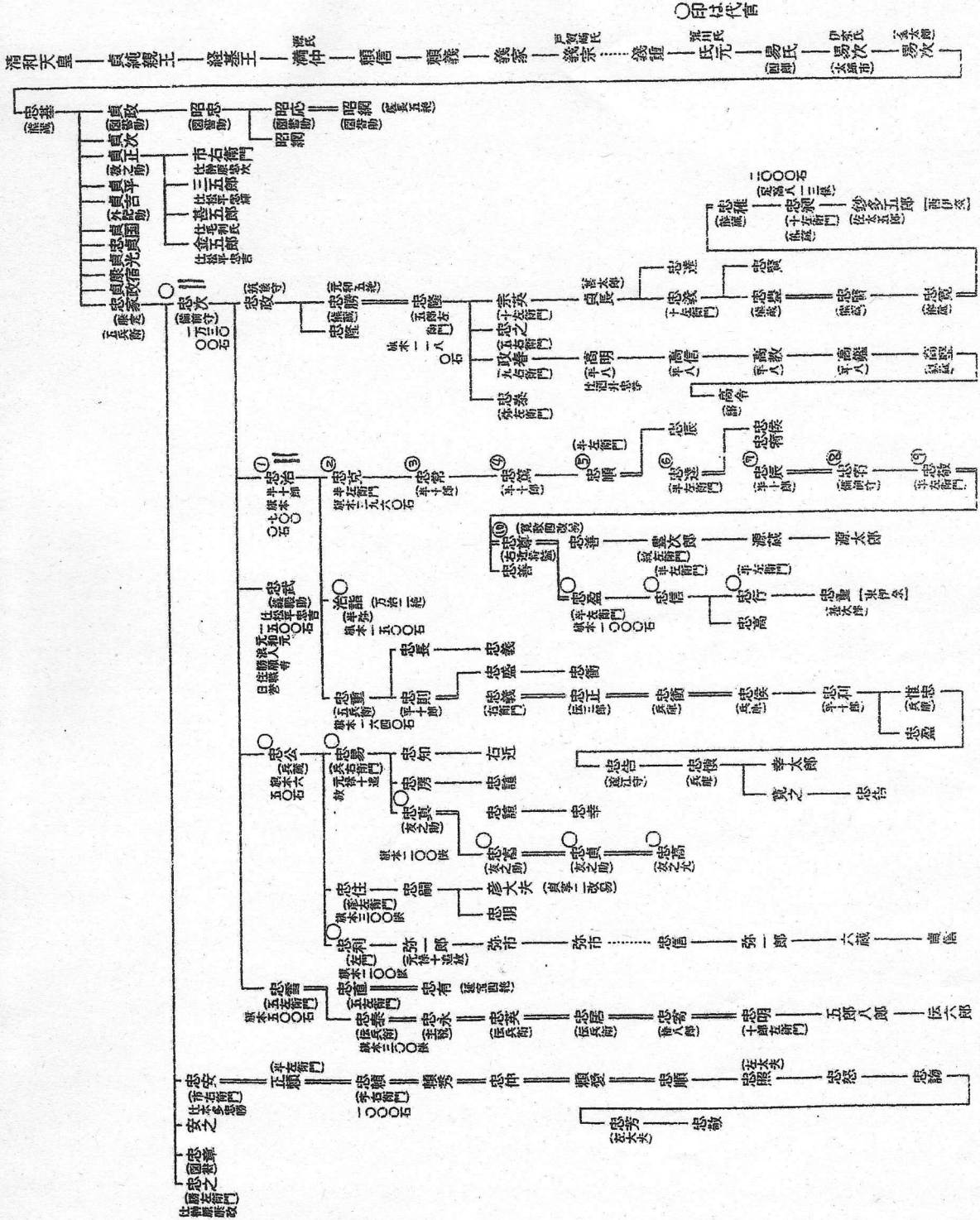
郡代10代忠尊は天明3年(1783)、浅間山が噴火して、現在の群馬・埼玉県域の農村や江戸の町にも降灰による被害を出したため、その復興に当たるとともに、利根川の川底に灰がたまり河底が上がり洪水を引き起こしたため、河川の改修・浚渫を行っている。

### むすびに

以上のように、伊奈忠次は関東入国以来、関東の地方支配に関する検地・新田開発・年貢収取・土木治水と防災等様々な農政や治水・災害に対して有効な政策実施に活躍したのであり、徳川幕府の基盤を創った人物である。晩年には幕府の年寄衆(老中)に近い地位になって政治的な役割担っていたのである。またその子孫である伊奈忠治以下の関東郡代も伊奈忠次ほどには強大な権限はなかったものの、江戸幕府の成立後、幕府の地方支配に関する検地・新田開発のほか、土木治水と防災等様々な農政や治水・災害等において活躍し、その検地や土木治水の技術は伊奈流・関東流と呼ばれた。

そのことは今日の農村地帯を形成する大元の役割を果たした家柄といえよう。したがってこのような伊奈忠次の功績を称えて、昭和18年(1943)小室村と小針村の合併にあたり伊奈村に、昭和45年(1970)には町制施行により伊奈町にと町名が付けられたものであろう。そもそも市町村名はほとんどはその土地の地名にちなむものであるが、伊奈町のように人名が市町村名に付けられる事例は、本州以南では、私の知る限りではこの伊奈町と愛知県の豊田市のみである。それだけに伊奈忠次はテレビの時代劇などには登場しないものの、お話して来たように幕府の成立にはなくてはならない人物であったことを、広く住民の方々に記憶していただきたいと願っている。現在伊奈町の人口は4万5000人ほどと窺っているが、今後5万人になって市となる時には、是非伊奈市と名付けてほしいと願っている。(長野県に伊那市があるが、字が異なるので問題はない)

# 伊奈氏系圖 (和泉清司氏作成「伊奈町史 通史編」原始・古代・中世・近世「所載」)

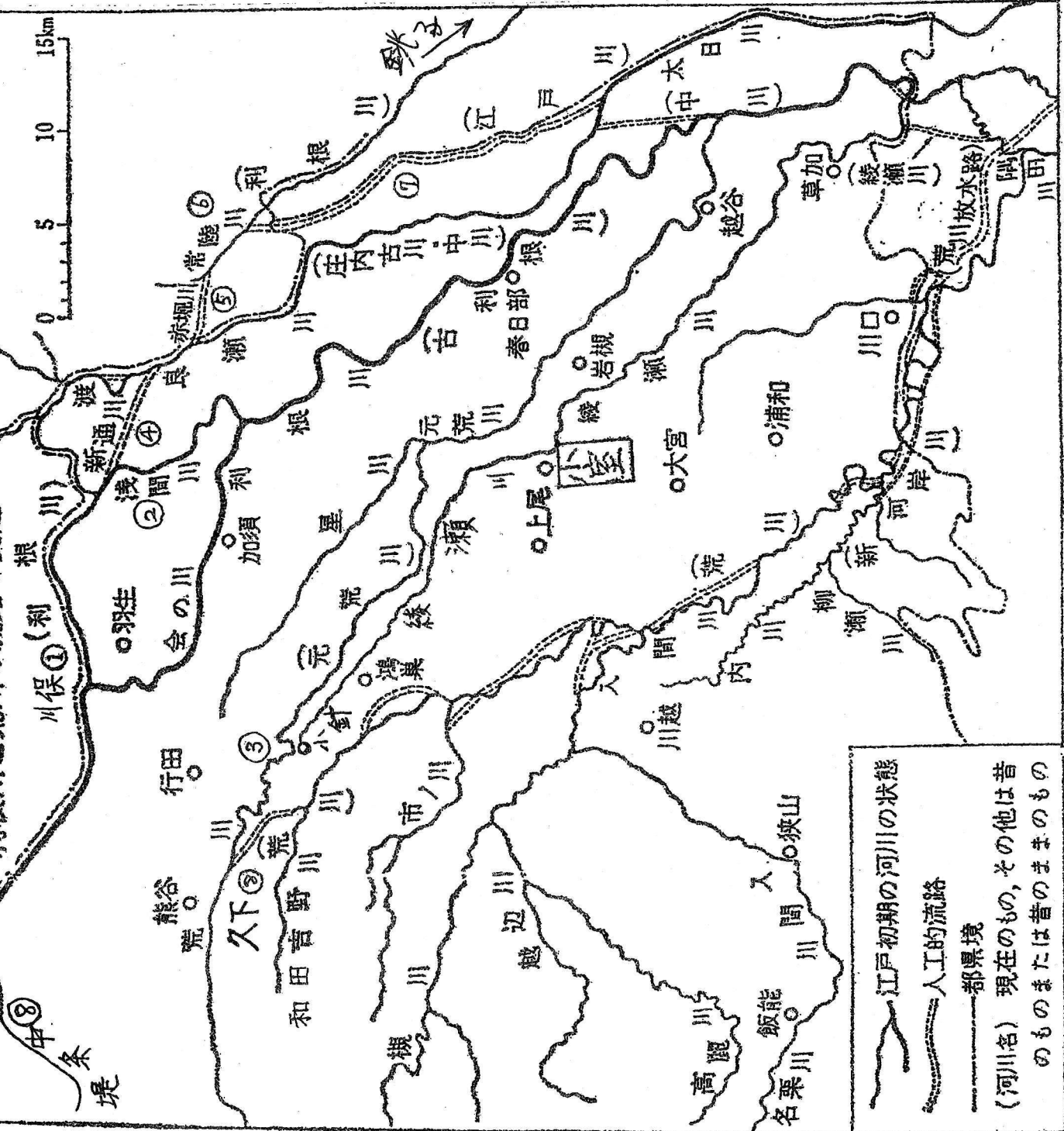


出典 (寛政重修家譜、小川泰一編著「寛政譜以降旗本百科事典」および個別の伊奈家家譜等による)



[地図 1]

利根川と荒川の流路の変遷



江戸初期の河川の状態  
 人工的流路  
 都県境  
 (河川名) 現在のもの, その他は昔のものまたは昔のままのもの